

(故) 猪股俊司先生の思い出

小宮 正久*

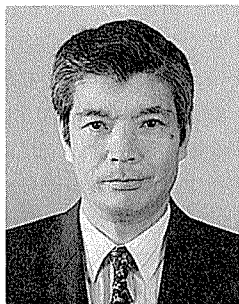
先生を最初に見たのは、大学2年生の夏の暑い日である。非常に鮮烈な印象が今でも残っている。一言、非常に格好良い人であった。信州の田舎者にとって、夏の強い日差しの中の白麻のスーツの鱗脂の蝶ネクタイに白いハットという服装の先生は、たいへん涼しげで非常にスマートに見えた。またそれが、長身瘦躯の先生にはたいへんよく似合っておられた。ただ、そのときには、その人が猪股先生であるということを私は知らず、隣にいた勉強熱心な級友から、猪股先生であること、プレストレストコンクリートに関して日本の大権威者であること、単位(鉄筋コンクリート)はなかなかもらえないこと、先生の卒業研究を受講できるのは、2, 3人の極少数の者であること等を教えられた。当時の私は、もとよりプレストレストコンクリートが何であるかまったく知らなかったが、土木工学という野暮ったい語音をもつ学問分野の中であって、この横文字名の原産地がフランスであると聞かされたハイカラな代物は、先生のカッコヨサが鮮烈であったがゆえにより一層印象的であり、鮮やかな記憶として残った。この日の猪股先生と初めて聞いたプレストレストコンクリートという組合せに対する鮮烈な出会いがなかったならば、私はたぶん横浜市あたりの職員として、たとえば地下鉄を専門とする技術者になりおおせていたであろうと思われる。先生のこのカッコヨサ、ダンディズムは、生涯変わりなかったと思う。

鉄筋コンクリートの最初の授業は、再び鮮烈であった。授業を開始して間もなく、私語を交わしていた運動部員(確かボクシング部であったと思う)の者数名を大音声で怒鳴りつけ退席させたのである。私学の通幣として、宣伝のために運動部員が相当数在籍しているが、彼らの中には、一種の特権を有していると錯覚している者があり、傍若無人の振舞いが目立った。彼らの振舞いを見て見ぬ振りをする先生方が大部分であったが、猪股先生はさにあらず、噂のとおり(毎年同じような事件が起こっていたらしい)彼らの所作を許さなかったわけである。さりながら、先生は別に運動部員であるがゆえに彼らを咎めたわけではなく、ただ真面目に学ぼうとする者に迷惑を及ぼす者として彼らの姿勢

を咎め、学ぶべき者のとるべき姿勢を教えたに過ぎない。それゆえ、勉強しようとする者、勉強しなければならない立場にある者に対しては、たいへんに親切であった。最終学年の前期に、猪股先生によるプレストレストコンクリートの講座が設けられていたが、その最後の時間を割いてプレストレス力による不静定力の計算方法について講義された。その講義に先立ち、この講義は大部分の受講者には、必ずしも必要ないが、この中に卒業研究のテーマとしてPC連続桁橋の設計を選択した者があり、その者にとっては、不可欠の問題であるのでその者のためにこの講義を行う。したがって、この講義を受講しなくても条件を満たしている者には単位を与えるゆえ、退席したければ退席してもよいということであった。PC連続桁橋の設計を選択している者とは、なぜか先生の卒業研究の受講を許された私である。最初の出会いは異なり、このときには、先生の偉さは十分に承知していたから、いかに勉強嫌いで、怠け者の私でもこのような贅沢な処遇を受ければ勉強せざるを得なかった。このとき、講義された計算方法は、不静定構造物を静定基本系に置き換え、仮想仕事の原理を利用し変形を求める計算手法であるが、この方法については、このとき徹底的に勉強した。そのお陰で以後、不静定構造物の解析において苦労するということはあまりなかった。この卒業研究を通じ、私は、設計計算を行ううえで必要な基礎事項のすべてを教わった。その主なものは、力の釣合い($\Sigma H=0$, $\Sigma V=0$, $\Sigma M=0$)と変形の適合である。しかしながら、最も重要な教えは、設計することの面白さであった。

大学卒業後、親は、公務員になることを望んだけれども、設計の面白さに酪酊していた私は、先生が役員をしている(株)日本構造橋梁研究所に入社した。

入社以来、亡くなられるまでの24年間直接、間接、先生のもとで、教えを受けながら働いたが、とにかく、時間に厳しい人であった。土曜日の9時からの会議(このとき、当社はすでに週休2日であった)に、前日台風が関東に襲来したせいもあって電車が遅れたため、5分程度遅刻したことがある。5分程度の遅刻は大目に見てもらえると思い、会議室の扉を開けた途端、言い訳をいう間もなく叱られた。会議のメンバーはみな、私の上役にあたる人達であったから、何が起きて、何を置いても真っ先に会議室に着いていなければならないということはおも、先生にあっては、会議時間は、会議を始める時間であり、その時間までに会議場に入ればよいという時間ではないのである。以後、会議には、時刻どおり会議を始められるように、とくに猪股先生が出席される場合には早めに出席するように心掛けた。しかしながら、御多分に漏れず、遅れる人がある。社内の会議がいつも時間どおりに始まらないことに腹を立



* Masahisa KOMIYA
(株)日本構造橋梁研究所



写真-1 (故) 猪股俊司先生 (初代編集委員長)

て、席を立ててしまったことが何度かある。そのつど、出席して下さるようお願いにあがり時間にルーズな人に代わってお叱りを受けた。そのお陰で今は、会議にしる何にしる時間には遅れないようになっている(と思う)。

ケニヤのナイロビに赴任中、郊外にある自宅からホテルに先生を夕食のため出迎えに向かう途中陸軍の戦車輸送のコンボイに巻き込まれ、ノロノロ運転を強いられ、15分程度遅れやはり大目玉を食らったことがある。時間に遅れたら、どんなに叱られるか分かっている私は、運転手にコンボイを追い越すように命令したのだが、そんなことをすれば射殺されるということで、日頃少々オーバーなチップを与え、言うことを聞くようによく仕込んであるはずの従順なるドライバーが頑として言うことを聞かず、かような次第になったわけである。このときは少々理不尽と思いはしたが、時間に関してはこのようにことのほか厳しかった。

仕事熱心ということでは、また人後に落ちぬ人でもあった。台湾に出張したときのことである。第1日目の会議は若干の説明用補足資料の追加を要請された以外は、無事終わった。先生は、VIPであるから、会議終了後は、必ず歓迎の晩餐会に招待される。私も随員として、当然のごとく招待される。現在ではそうでもなくなったが、当時(今から20年ほど前)は、熱烈歓迎の精神がほとんど原形のまま残っていて、食事は喉から出そうになるまで詰め込まれ、紹興酒の乾杯(カンペイ、いわゆる一気飲みである)の嵐に包まれる。その晩餐会も終わり、ホテルに戻ってやれやれやっと思えるかと思っていた途端、猪股先生から本日の会議の宿題である補足資料の作成を明朝までに終えるよう命令された。夜の10時過ぎである。しかもたらふく食べ、数えきれぬほどの乾杯を繰り返した後では、もはや頭脳を稼働状態に戻すのは、至難といつてよい。夜中までに仕込みを終え、明朝4時起床、8時の朝食までの間に何とか終え、食事をとりながら検閲を受ける。何とか合格。出張中、ほぼこの繰り返しであった。

スリランカのJICAの仕事の折、成田からバンコクへ向かう飛行機の中で機内食を食べ終え、適当に飲んでうとうとしていると席に呼ばれ中間報告書の英文にクレームがついた。差し替えると言う。今のように、Note型パソコンなどのない時代であるから、基本的に差替え部分は、手書きに

ならざるを得ない。書換え英文のドラフトの作成、検閲後の清書と、バンコクまでの残りの2時間ほどの限られた時間すべて、大わらわであった。このときばかりは、飛行機が遅れてくれることを心から願った。結局、飛行機の中だけでは終わらず、ホテルで夕食後に仕上げた。かように、猪股先生との海外出張は、24時間すべて仕事であった。ただすべての仕事が終わった後の最後の夜は、ホテルのバーで好きなだけ、好きなラベルのウイスキーを飲ませてくださった。台湾の出張の折は、まだ若く先生と2人だけで夜明けまで種々さまざまな話を聞きながら飲むことができた。忘れ得ぬ思い出である。翌朝、宿酔で朝食時間に10分程度遅れたが、さすがにこのときは叱られなかった。

食事に関しては、うるさいことは言わず、いわゆるグルメではなかったように思う。どこに行っても細かいことは言わず何でも食べられた。ただ、ラーメンが大好きでとくに一杯飲まれた後は、ラーメンを必ず注文された。ラーメンを食べたいと言われれば、これはお開きの意味で、面倒はないのだが、時間と場所を選ばないのには、少々困らされた。若い頃社員旅行の折、先輩の命令で、真夜中過ぎてからラーメン屋探しに借り出されたこともある。結局、田舎のことで10時を過ぎて開いているような食物屋はなく、いたく不興を買った。これに懲りて先生と飲む折には、ラーメンの調達の可否について事前に調査し、調達可能なように手を打った。どうしても不可能な場合は本日は無理なことを事前にお知らせし、了解を願った。

ナイロビで仕事を始めるにあたり、事務所開きのカクテルパーティーを催した。ホストはもちろん先生で、7時の開宴であったと思う。最初は機嫌良くお客さまと談笑していたのであるが、おしゃべり好きな外国人の中には閉宴時間の9時を過ぎても帰らない者がかなりいる。成田からナイロビまではヨーロッパ経由でトランジットの時間も入れると24時間以上かかり、時差は6時間ある。さすがの先生も9時半を過ぎると空腹と長旅の疲れが重なり少々不機嫌になってきた。拙宅にラーメンが用意してある旨を告げると、ウソのように機嫌を直された。このときは、日本から持参して冷凍しておいた生ラーメンを「將軍」という日本料理屋の板前さんに出張をお願いして作ってもらったのであるが、なかなかの出来栄であった。仕事で喜んでいただいたことはほとんどないが、このときはぜひぶん喜んでくださった。

先生からは数多くのことを教わったが、今でも肝に銘じていることが2つある。1つは、物の形は絶対に計算で決めるはいけない。必ず図面にして形のバランスを見て決めろということである。エンジニアとくに設計屋というのは、図面を描くより計算の方が好きで、また計算の方を上位に置く傾向がある。そのため、図面を描かずに計算だけで形を決めてしまうことがかなりある。計算結果は相対的ではない。たとえば自重の重い非効率な断面形状を仮定しても補強量を多くすれば十分条件を満たす計算結果が得られる。そういう断面は、図面にしてみれば一目瞭然、無駄だらけの断面であることが分かる。逆に、極めてスレンダーすぎる断面形状を仮定しても同様である。そういう断面は

図面にしてみれば、どこか頼りなく、施工が困難なことが知れる。図面を描くということの最も大きな効能は、エンジニアにとって最重要な素質の一つである感性が研かれるということである。感性の乏しい技術屋は百害あって一利もない。

もう1つは示方書に頼った設計をするな、自分でクライテリアを決めて、そのクライテリアに従って、物を造れということである。欧米における示方書は、自分でクライテリアを決められない二流以下のエンジニアのためのものである。したがって欧米の一流のエンジニアと伍していくためには、自分でクライテリアを決めて設計できるエンジニアたねばならないということを折に触れて言われた。これは、自立したエンジニアたれということであり、エンジニアにとって、最重要の素養であろう。これらのことを突き詰めると、感性に勝れた自立したエンジニアたれということである。国際化が叫ばれる今日にあって望まれるエンジニアの姿を見事に示しているのではないかと思う。

先生が亡くなられてから9年になる。私はかなり生意気

な小僧であったから、ずいぶんと無礼を働き、先生はきつと何度となく腹を立てられたことと思う。そのうえ、言うほどの成果を上げ得ていないのだから、私が先生の立場であったならば遠の昔に見離していたに違いない。先生は、本当に気の短い人であったから、相当に我慢を強いたことは間違いない。まったくもったいないことである。反面、私個人に限っては、たいへん運が良かったと思わざるを得ない。亡くなる3年ほど前に、厚かましくも先生に、私は先生の弟子でしょうかと聞いたことがある。先生はしばらく考えられて、弟子と言うよりは、pupilかなと言われた。私は、先生にとってはやはり、腕白小僧であつたらしい。さりながら、私はこのことを大いに誇りにしている。いつかあの世でお会いしたとき、日本語で弟子として認めていただけよう、今後とも怠けぬようにしたいと思っている。

最後に、このような一文を書く機会を与えていただいたPC技術協会のすべての方々に深く感謝いたします。本当にありがとうございました。

【1999年12月3日受付】

◀刊行物案内▶

- 複合橋設計施工規準(案)
- PC構造耐震設計規準(案)
- PC斜張橋・エクストラドーズド橋設計施工規準(案)－抜粋－

(平成11年12月)

頒布価格：3点セット 5 000円 (送料600円)

社団法人 プレストレストコンクリート技術協会